

国立国語研究所学術情報リポジトリ

富山県における指定辞デヤ・ダ・ジャ・ヤの分布と 変遷

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): copula da, Toyama dialect, East-West distribution, standard forms in Western dialects, Han 作成者: 小西, いずみ, KONISHI, Izumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002008

富山県における指定辞デヤ・ダ・ジャ・ヤの分布と変遷

小西 いづみ

(東京都立大学)

キーワード

指定辞ダ, 富山県方言, 東西分布, 西日本共通語, 藩

要旨

富山県における指定辞の調査から, デヤ・ダ・ジャ・ヤの地理的分布, 各分布域での併用状況を示し, 変遷過程を考察する。結論として, 富山市周辺に分布するダは, 古態のデヤから変化してできたものであること, 県西部や岐阜県境のジャ・ヤは, それぞれ石川や岐阜側から伝播したものであること, 県東端部ではデヤがジャに内的変化したとも, 県西部からジャが伝播したとも考えられること, 現分布域の形成には近世期の藩領が関わることなどを述べる。

1.はじめに

いわゆる指定(断定)の助動詞(ここでは指定辞とする)は, おおまかにみて東にダ, 西にジャ・ヤという東西分布を示す。その分布の概要是『日本言語地図』(以下LAJ)46図で見ることができる。文献国語史の立場からは, 先行研究により, ダ・ジャの前身として, キリストン資料に次のような「dea」の例, 抄物資料に「デヤ」などの例があったことが明らかになっている¹。

- Yarixita de cubiuo toruuua tegaradea. (槍下で首を取るは手柄である。)

(『邦訳日葡辞書』p.812「槍下」, 下線は筆者)

これら「dea」「デヤ」は, デアルのルが脱落することにより生じた語と言われている。芥子川(1971), 彦坂(1997)は, 近世期尾張近辺の戯作資料等にも「デヤ」などが見られるなどを明らかにしている。現代諸方言にも, 奥能登(愛宕1969), 奥丹後から兵庫北部(室山1965・同1967)などで, 文献の「dea」「デヤ」に関連すると思われる「デヤ」などが残存していることが報告されている²。また, 西日本では, 山陰(LAJ46図)や熊本(九州方言学会1969, 30図)にダがあるなど, 単純な東西分布として割り切れないこともよく知られている。

富山県方言は, 本土方言全体から見ると西日本方言に属すが, 県の東部には東日本方言的な要素も存在すると言われている(真田1994, p.132など)。指定辞の分布においても, 西日本的なジャ・ヤとともに, 古態的なデヤ, 東日本的なダがあることが, 『口語法調査報告書(下)』pp.746-747, 金森(1932), 真田(1984)などの先行研究によって知ることができる³。しかし, デヤ・ダ・ジャ・ヤがどのような地理的分布をしているか, また, どのような変遷過程をたどったかについては十分明らかになっていない。本論は, 隣地調査の結果に基づいて富山県内の指定辞の地理的分布を示し, その変遷過程について考察することを目的とする。

なお本論では、[dʒa]～[ʒa]を区別せず、ジャと表記する場合がある。

2. 調査・分析の方法

1995年5月～1997年8月、富山県内73地点(=集落)で面接調査を行った。図1に調査地点を示す。話者は60歳以上の男女で、調査地点で言語形成期を過ごしたかた計81人(1地点に話者2人以上のところもある)、及び60歳未満の男女5人である。60歳未満の話者については数が少ないので、変遷を考える上で補足的に触れる。

調査形式は、共通語の短文を提示する翻訳式の質問調査を主とした。指定辞の項目は活用形・音環境などにより20数目用意したが、話者の使用状態などによって加減した。質問項目の一部を下に示す。

終止形：あっちは東だよ。；もうすぐお盆だね。〔撥音前接。3.3.1.参照〕；

あの人は高岡から来たのだよ。〔のだ文。3.3.3.参照〕；

この辺りも夜は静かだね。〔形容動詞。注4⑤参照〕

推量形：あの木は多分桜だろう。

過去形：あの辺りは昔、畑だったよ。

順接：子供なので分からなかった。(「なので」相当ではなく「だから」相当の回答のみ採用)

逆接：あの人は近所の人だけれどもよく知らないよ。

結果分析には、①質問的回答(以下「回答」)、②調査中に話者が、調査者(筆者)や同席者に対する自然な会話の中で用いた例(以下「自然談話」)の両方をデータとして用いる。

3. 調査結果

3.1. 地理的分布

図2は、全項目的回答と、自然談話の非共通語形(ダ以外の語形)をあわせて、60歳以上の話者における地点ごとの使用状況を地図化したものである。ほとんどの地点で2つ以上の語形を併用し、3つや4つの語形を併用する地点も多い。そのため、併用語形をすべて同列に扱わず、全項目の回答数を比較して優劣を判定した⁴。ただし、自然談話のみに現れた語形は使用数に関わらず全て劣勢とする。

記号化に関しては、①西日本的な語形ジャとヤを主に使用する地域はどこか、②東日本的な語形ダを主に使用する地域はどこか、③古態的な語形デヤを使用する地域はどこかという点に視点を置いた。ともに西日本的な語形であるジャとヤの分布の違いを見ることは重視していない。

この視点から図2の分布を読み取ると、おおよそ以下のa～dのように地域区分できる。地域名は図1をあわせて参照されたい。呉西(ごせい)・呉東(ごとう)は、富山市の西部にある呉羽(くれは)丘陵を境にして、県を東西に二分した場合の名称である。

a) 呉西 [地点1～13]

ジャとヤを主に用い、ダはほとんど用いない。

- b) 岐阜との県境、西猪谷(にしいのたに)・東猪谷(ひがしー) [地点72, 73]
 ジャとヤを主に用いる。ダは少ない。
- c) 呉東のうち、b・d を除く地域。富山市を中心とする、その周辺域。 [地点21～51]
 ダを主に用いる。
 c-1) ダを主に用い、ヤも用いる。主に平野部。
 c-2) ダを主に用い、デヤ・ジャ・ヤも用いる。
- d) 富山市常願寺川(じょうがんじがわ)以東の海岸部～下新川郡(しもにいかわぐん)
 ジャとヤを主に用いる。ダは少ない。 [地点52～71]
 d-1) ジャとヤを主に用い、ダは少ない。市街地周辺に多い。
 d-2) デヤ・ジャ・ヤを主に用い、ダは少ない。

この地域区分で問題となるのは、次の3点である。第1点に、地点14～20はa～dのどれにも含まれない。地理的にa地域とc地域の中間に位置し、指定辞の使用もダ・ジャ・ヤとともに用いるという中間的な様相を示す。第2点に、c地域に含めた地点には、ダとジャまたは、ダとヤを同等に用いる地点がある。しかも、地点25～27のように、その分布がまとまっているところもある。第3点に、c-1とc-2、d-1とd-2の間に明確な境界があるわけではない。c・d地域全体で、吳東の周辺部にデヤが分布すると言える。これらの問題はあるものの、上記の地域区分は、音環境などによる使用の違い(3.3.)や解釈(4.)を述べる際に有効である。そこで、以下ではa～dの区分にしたがって論をすすめ、上の問題点、特に第1点と第2点に関しては、解釈を述べる際にあらためて触ることにする。

なお、b地域ではジャの子音が摩擦音[ʒ]のことが多く、他の地域では一般に破擦音[dʒ]である(母音間で破裂が弱まる程度)。この摩擦・破擦の違いは、指定辞ジャに限らず、ザ・ジャ行・チ・ヅの子音全体にわたるものである。b地域に接する岐阜県では、ザ行子音などが語頭・語中を問わず摩擦音で発音される⁵。bの2地点の摩擦音は、岐阜県と地理的に連続したものであろう。後述するように、この地域は指定辞に関しても岐阜県側の影響が認められる。

3.2. デヤの変種とその分布

デヤは、[d]の口蓋化した音を子音とする[dja] (IPAの口蓋化を表わす補助記号は上付きの小さなjだが、ここではjで代用する)と発音されるのがふつうである⁶。その他、口蓋化が弱くダに近く聞こえるもの、摩擦的噪音を伴いジャに近く聞こえるもの、リヤに近く聞こえるものもある。実際には、それぞれの間に無限の中間音がある。以上の全てのバリエントを含めて、本論では、デヤと表記する。

地域的偏りのない3地点で1例ずつ、母音部分が少し長めで、[e]から[a]へと連続的に口が開くように聞きとれるものもあった。キリストン資料の「dea」との関連が思い浮かぶ。ただし、聞きようによつてはそのようにも聞こえるという程度で、実際は[dja]の母音をゆっくりかつ長めに発音した場合と区別がつかないため、意味のある差異とは思えない⁷。まして[djea]や[dea]

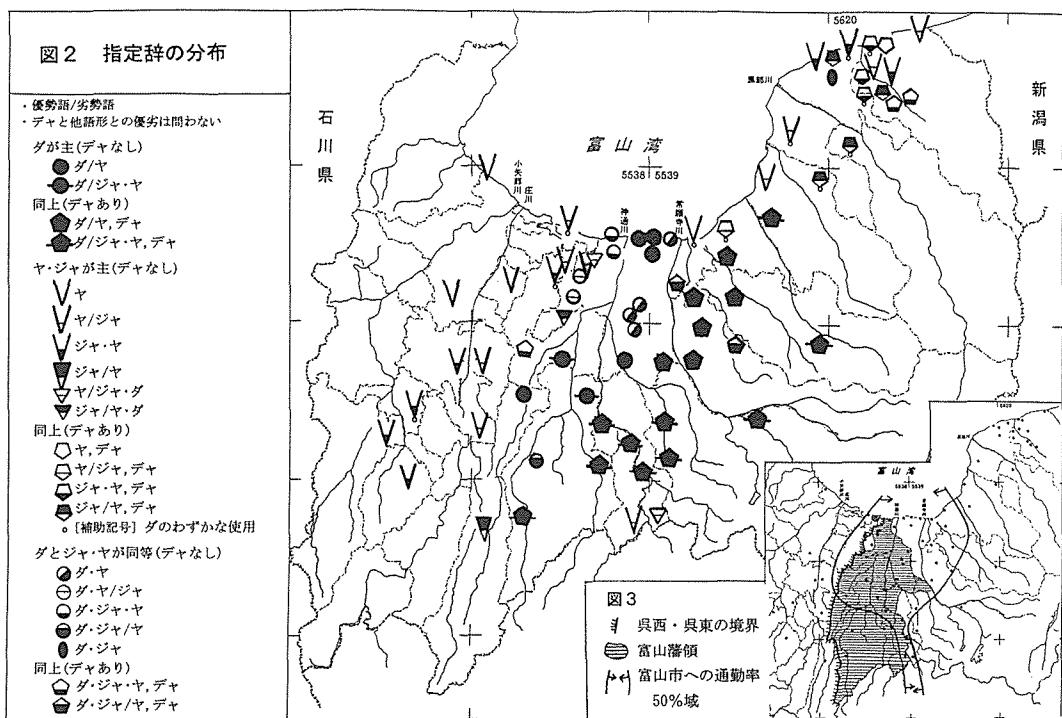
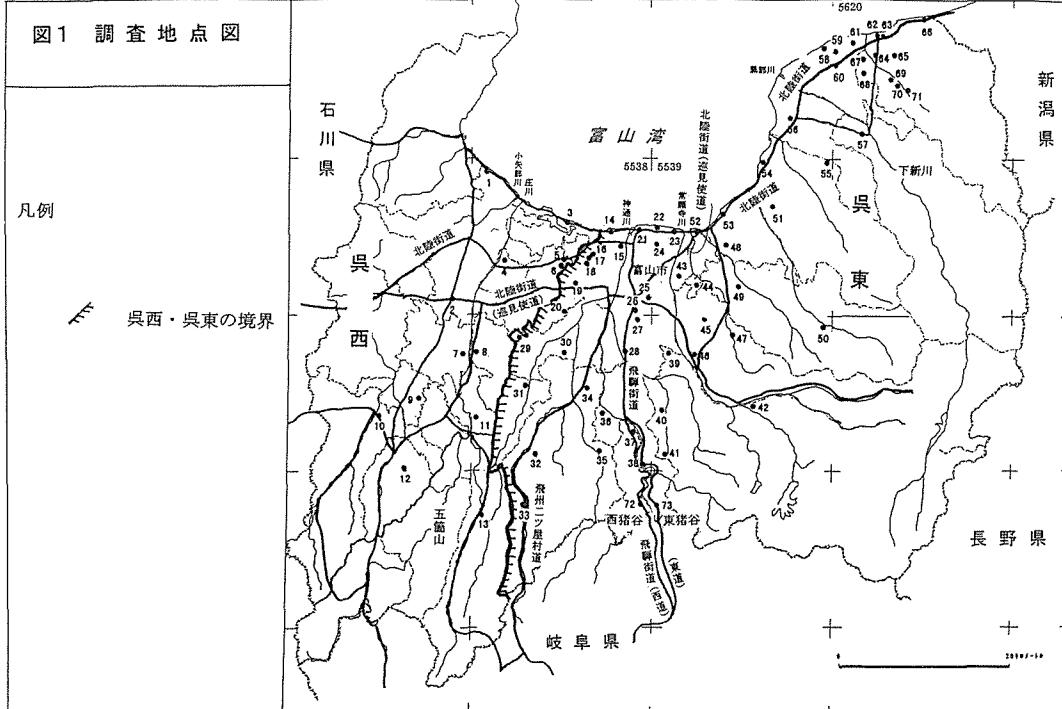


図4 デヤーマ・ジャーマなどの分布

凡例

- ・昔使用したことば [～]は音声的なゆれ
- ▲ デヤ[dja]ーマ
- ▼ デヤーサマ
- ▽ デヤーサマ [～ジャーサマ]
- デヤーマ・デヤーサマ両方使う
- ▲ デヤーサ
- デヤ
- ◎ デーデヤ(ー) [～デージャ(ー)]
- ◎ デージャ(ー)
- △ ジャ[cha]ーマ
- ▽ ジャーサマ
- △/▽ ジャーマ・ジャーサマ両方使う
- △ ジャーサ
- ジャ
- | 使ったことはないが、地域のことば
(記号の上部に)
- | よそのことば ・聞いたことがない
4→40代、5→50代の話者
- (それ以外の地点は未調査)

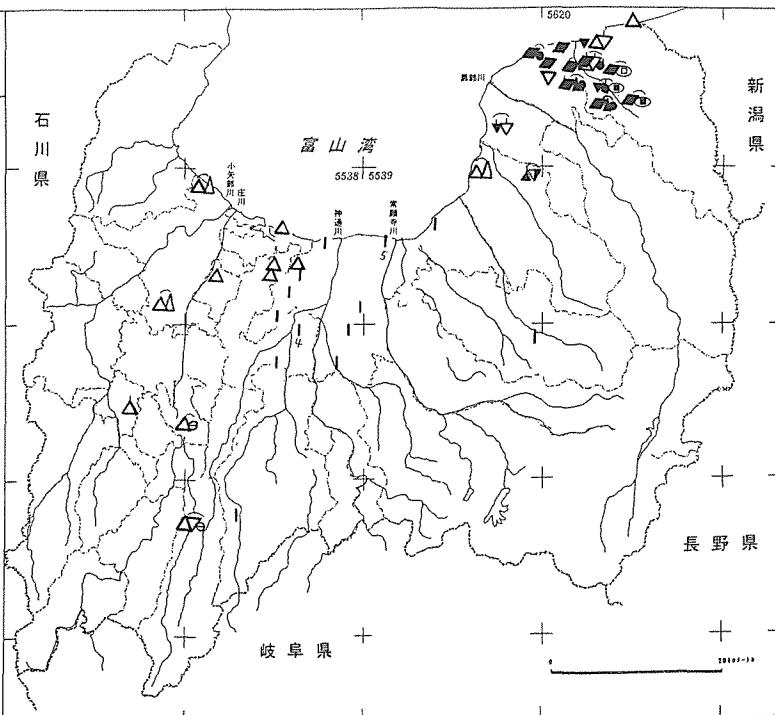


図5 指定辞デヤと「では」のデヤ

凡例

- ◆「では」相当のデヤを用いる
- ◇指定辞デヤを用いる
- 両方用いない

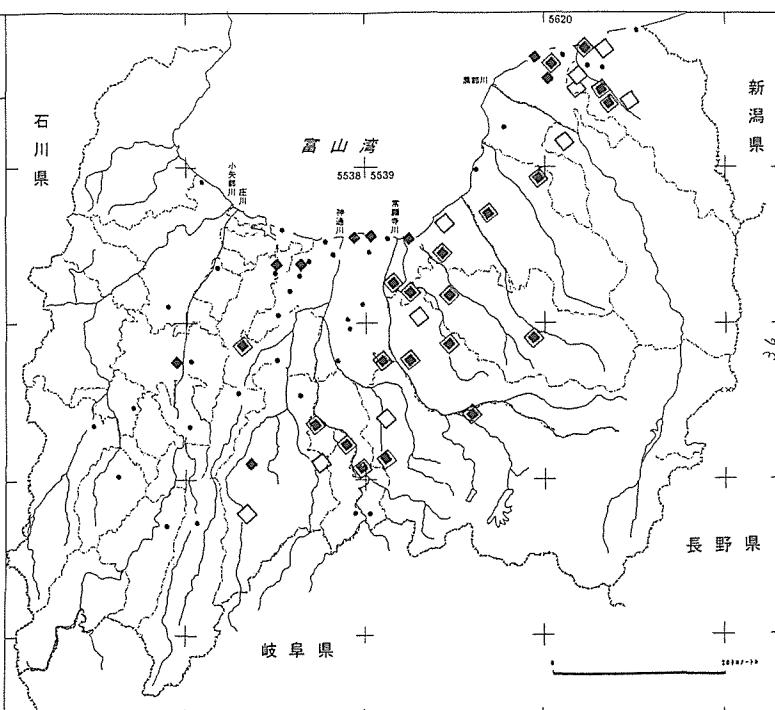


図6
指定辞ダと「では」のダ

凡例

- 「では」相当のダを用いる
- 指定辞ダをよく用いる
(他の語形に対して優勢か同等)
- △指定辞ダを用いる(他の語形に対して劣勢。わずかな使用は除く)

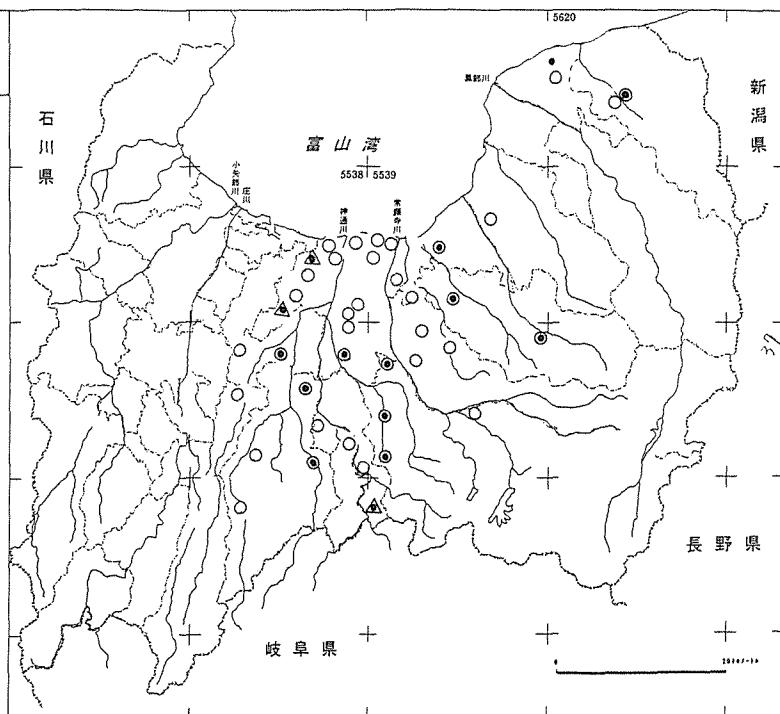
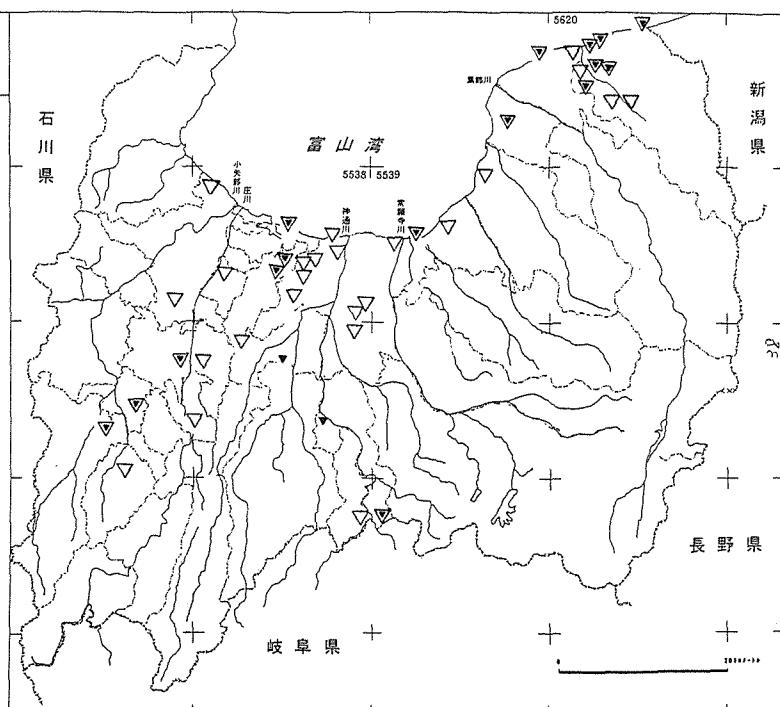


図7
指定辞ヤと「では」のヤ

凡例

- ▼「では」相当のヤを用いる
- ▽指定辞ヤをよく用いる
(他の語形に対して優勢か同等)



のような、2モーラに数えうる例はなかった。

デヤの変種の現われ方には、以下のような地域的偏りがある。

(1) リヤに近いものは、c-2 地域の山手の地点に多く、d-2 では聞かれない。

(2) ダに近いものは、c-2 で用いられることが多く、d-2 ではあまり聞かれない。

デヤがリヤとなるのは、ダ行子音とラ行子音の交替現象の1例と考えられる。注4③も参照されたい。(1)は、その交替現象がc-2 地域の山手に起こりやすいことを示している。(2)はc 地域でダが多いことと関連があるのでないかと思われる。

話者の使用意識という面からは、

(3) デヤを使う話者は、デヤの使用を意識しておらず、c-2 地域では「自分はダを用いる」、d-2 地域では「自分はジャを用いる」と内省する話者がほとんどである。

と言える⁸。ほとんどの話者は「ヒガシデヤと言いませんか」と誘導しても「言わない」と答え、あとになって回答や自然談話にデヤが混じる。ダやジャを誘導してデヤが得られることもある。さらに

(4)c-2 地域のジャは、デヤの音声的変種と言えるくらいの不安定なものでしかなく、話者も「ジャは使わない」と内省することが多い。

ということも言える。ただし後述するようにc-2 地域にはジャが安定して用いられる地点もあり、そのような地点では、岐阜県側やa 地域の影響があると考えられる。

デヤ [dja] は、①指定辞、②「では」相当、③「デヤー(サ)マ」などの3つ(②は5. ③は4.3. 参照)に限って用いられる。そのような限られた場合に用いられるために意識されにくく、(3)のような話者の意識が生じると思われる。ダ・ジャ・リヤに近く発音されるというのも、デヤがそのような特殊な音のため、より安定性のある類似音に近づこうという変化の一過程と言えよう。

3.3. 前接音、活用形・表現法による違い

図2では、2つ以上の語形を併用する場合、回答数による優劣のみを考慮し、活用等による違いを考慮していない。しかし、前接音や活用形・表現法による語形の偏り多くの地点で観察された。これは以下の4点にまとめることができる。4つとも回答にも現れる傾向だが、より顕著な自然談話のデータを次頁に表1として示す。これらの傾向と図2との関係についても、それぞれの箇所で触れる。

3.3.1. a・b・d 地域のジャ

第1点は、西日本的な語形のジャとヤを主に用いるa・b・d 地域のジャについてである。

(1) a・b・d 地域のうち、ヤに対してジャが劣勢の地点では、ジャが、撥音前接時に用いられることが多い。

表1の地点8,11,12,72,53,64,68を参照されたい。A列とB列を比較すると分かりやすい。B列の数値のもととなる「ジャ以外の撥音前接例」の内訳は省略した。なお、a・d 地域はもちろんのこと、b 地域でも「撥音+ジャ頭子音」は「閉鎖鼻音+破擦音」であり、「鼻母音（または、鼻音化

した無摩擦の [z] と言われるもの) + 摩擦音」ではない。図2で「ヤ/ジャ」となる地点では、ジャの多くがこの(1)にあてはまる例である。

表1 自然談話における指定辞の使用

- ・ン、ガ、ソ、推は全て内数。
- ・ン—撥音前接　・ガ—「のだ」相当の「ガヤ」。終止法以外も含む。
- ・ソ—「ソーヤ」「ソヤソヤ」などのあいづち表現。「ソヤソヤ」は2例と数える。　・推—推量形。
- ・A—ジャの撥音前接例／ジャ全例(%)　・B—ジャ以外の撥音前接例／ジャ以外の全例(%)
- ・ダの内訳一～：文中の接続表現。無印：文頭に来る例(接続詞相当)

地 域	地 点	ダ	ジャ	ヤ	デヤ	A	B	ダの内訳
			ン	ガソ推				
a	8	0	4 4	29 — —	0	100	17.2	
a	11	2	6 5	121 — —	0	83.3	8.9	ダカラ：1
a	12	4	2 2	33 — —	0	100	5.4	ダカラ：3, 助詞ダッテ：1
b	72	50	2 1	31 — —	0	50	16.1	ダカラ：18, ダケレドモ：1, ~ダカラ：4, ~ダケ(レ) ド(モ)：3
c	28	50	0 0	17 3 14 0	0	—	—	
c	49	28	0 0	27 3 24 0	14	—	—	
c	22'	11	0 0	8 0 0 7	0	—	—	
d	53	13	2 2	29 — —	1	100	17.2	ダカラ：4, ホダケニ：1, ~ダカラ：5, ~ダレド：1
d	64	6	1 1	56 — —	0	100	19.6	ダカラ：4
d	68	7	9 7	121 — —	1	77.8	5.8	ダカラ：1, ~ダケドモ：4

ジャに前接する撥音は、多くが名詞の語末音だが、語による偏りはないので、音声的なレベルでの現象と思われる。愛宕(1969)によると、奥能登珠洲方言にも(1)と同様の傾向があるという(p.51)。日本放送協会『全国方言資料』、国立国語研究所『方言談話資料』の録音テープによる筆者の聞き取り調査では、富山県飯久保、同小摺戸、石川県白峰、同大根布、同海士町、同向田、福井県納田終、三重県川上、滋賀県朽木村、兵庫県粟賀(以上NHK資料。地名は「府県」+「テキストに記されている最も下位の地名」)、福井県下中津原町、京都府觀音堂・桜(以上国語研資料。地名は上に同じ)でも同様の傾向が確認できた。これらの資料によると、「ン+ヤ」ないし「ン+ジャ」が「ンニヤ」のように発音される地点も、より広い範囲に見られる。上記の地点のいくつかには、こちらの現象もある。

これらは、いわゆる「連声」や「新濁」と類似した面をもっている。歴史的日本語や現代日本語諸方言における撥音の性質に関わる問題だが、本論ではこの現象の存在を指摘するに留める。

3.3.2. a・b・d 地域のダ

第2点は、(1)と同じ地域でわずかに用いられるダについてである。

(2) a・b・d 地域でダが使われる場合、順接「だから」、逆接「だけれども」相当形、及び助

詞ダッテが多い。特に、文頭に来る接続詞ダカラの例が顕著である。

表1の地点11,12,72,53,64,68の「ダの内訳」を参照されたい。図2で「ダのわずかな使用」とある場合のダは、(2)にあてはまるものが多い。

3.3.3. c 地域のヤ

第3点と第4点は、ダ(とデヤ)を主に用いるc地域の、劣勢語ヤについてである。

(3)c地域の60歳以上の話者は、ヤを、①準体助詞ガについたヘガヤ(共通語の「のだ」。終止法以外も含む)、②人の話に賛成の意を表したあいづちの表現(ソヤソヤ、ソ(一)ヤ(ネ)など)で用いることが多い。

(4)c地域の若い世代では、ヤを、推量形のヤロ(一)という形式で用いることが多い。

(3)は表1の地点28,49、(4)は表1の地点22'を参照されたい。「22'」は、地点22の隣接地点で、20代の話者である。「ガヤ」については、注4の②も参照されたい。図2のc地域中でヤが劣勢の地点の場合、そのヤは(3)にあてはまるものが多い。

3.4. 世代差・男女差

60歳未満の話者は数が少なく、地点・年齢もばらばらだが、その結果の範囲内で言えることを簡単にまとめる。a地域の若い世代では、調査したのは平野部のみだが、ほとんどヤのみが使われ、ジャは使われなかった。ダは3.3.2.(2)の範囲内で使われる。b地域は未調査。c地域では、ダとヤを使い、ヤに関しては3.3.3.(4)のような傾向が見られる。隣接地点の老年層と比べてダが増えるような傾向はない。d地域は、活用形・音環境ごとの質問調査は行っていないが、商店街など中心部の若い世代(20代から40代)の女性によると、ヤしか使わないという。全地域を通して、60歳未満の話者でデヤは1例も観察されなかった。

男女差についても数地点で比較しただけだが、同地域・隣接世代の同世代を比較したとき、女性でヤが若干増えるという傾向が指摘できる。

4. 指定辞の変遷

以上の結果から、富山県の指定辞がどのような変遷をたどったかについての解釈を試みる。

4.1. c 地域におけるデヤからダへの変化

3.1.で述べたように、デヤは、c・d地域、すなわち吳東の周辺部に分布する。このデヤは、中世末のキリストン資料や抄物に見られる「dea」「デヤ」などに通じるものと考えられる。ダやジャがデヤに変化したと考えるのは無理がある。よって、もっとも古い語形はc・d地域に用いられているデヤであると考える。

これを出発点として、次にc地域の優勢語形ダについて考える。結論から言えば、次のようになる。

- ・c地域のダは、デヤから変化したものである。その変化過程では、共通語ダによって変化が

促進されたり、安定を得たりしたと思われる。変化のきっかけが共通語ダの存在であったとも考えられる。

真田(1994)は、富山市周辺のダは、本来の「デア」から直接変化した形式であろうとみている(p.133)。筆者の解釈はこの見解を発展させたものである。

ほかの解釈の可能性について検討してみる。図2からは、経済・文化の中心地である富山市を中心としてダが分布し、その周辺にデヤ・ジャ・ヤが分布するように読み取れる。これをいわゆる周囲分布と見て各語形の新古関係を考えれば、デヤ・ジャ・ヤが古く、ダが新しいということになろう。その場合、ダは、①他地域からの伝播、②共通語化、のどちらかによると考えられる。①について検討すると、ジャとヤを主に用いるd地域が間に位置するため、新潟方面からダが伝播したとは考えにくい。海上交通などによって他の地域から伝播したことを示す積極的な証拠も見当たらない。よって①の解釈は支持できない。②については、ダが共通語化によるものだとしたら、なぜこの地域でのみ起こって、他の地域では起こらないのかが説明されなくてはならないと思う。また、a～dの各地域は、近世期に富山藩・加賀藩に別れるなど、それぞれ異なった社会的変遷を経ている。そのため、「中心にダ、周辺にデヤ・ジャ・ヤ」という県全体の分布から一元的な変遷過程を推定しても、あまり意味がないと思われる。

デヤがダへ変化したという解釈の積極的な根拠は次の2点である。

- ・c地域では、デヤの中にダに近いものが混じり、話者の意識上でもデヤとダが区別されていない。[3.2.より]
- ・共通語化ならば若い世代でダが増えると思われるが、そのような動きは見られない。[3.4.より]

特に2点目により、上記②のような単純な共通語化説は妥当でないと考える。

では、デヤからダへの変化がいつ、どこで、なぜ起こったのか。

「いつ」に関しては、あまり古い変化とは考えにくい。ダが古くから(例えば江戸初期～中期から)あったなら、周辺のデヤという不安定な存在が現在まで保たれた理由が見出しがたい。ただし、デヤがダに近く発音されること、ジャに近く発音されることとともに、ある程度古い時代から見られたかもしれない。しかし、それは音声的な「ゆれ」程度のものだったと思われる。

「どこで」については、現在デヤが使われず、ダが優勢な富山市、それも特に中心の市街地と考えるのが自然ではないか。市街地でより新しい言語形式が好まれたためと考えられる。

デヤが、ジャとダのいずれに近いかという点で発音上のゆれが見られたとしたら、変化の可能性としても、ジャへの変化とダへの変化の両方がありえた。しかし、実際にはダへ変化していった。それが「なぜ」なのか、現段階では明らかでない。だが、ダへの変化がそれほど古くないものであるとしたら、変化の原因の一つに共通語ダの影響があったであろう。その影響のしかたには、次の2通りが考えられる。第1には、[dja]が一般的でダ・ジャ両方にゆれている状態(ダ [da], ジャ [dʒa] に近いものも用いられる状態)だったが、共通語ダの影響により、ゆれの方向性がダに一本化されたというものである。第2には、別の原因によってすでに[dja]がダに近づいている状態だったところに、共通語ダの影響により、その変化が促されたというものである。いずれにせ

よ、現在 c 地域でダが安定して用いられているのは、共通語ダの威光によるところが大きいであろう。デヤが残っている c-2 地域では、富山市の中心地のダと共に共通語ダとがともに影響しあって、ダへの変化が行われていると思われる。

このような変化は、単純な「共通語化」とは区別して考えたい。デヤがダに傾くことがあったという内的な要因があった上で、共通語という外的な要因が作用したと考えるのである。

この解釈でもっとも問題となるのは、c 地域周辺部の劣勢のジャをどう捉えるかという点であろう。しかし、このジャの多くは 3.2.(4) で述べたような不安定なものである。地点 36(大沢野町葛原) や地点 50(上市町伊折) のような山間の奥地でも、ジャは同様に不安定な性質のものであることが観察された。このことは、c 地域において、ジャが安定して使われていた時代ではなく、ダより古い語形ではないことの傍証となる。ただし、ジャが安定してみられる地点 29・32 では、a 地域や岐阜県側の影響が考えられる(4.6. に後述)。地点 30・34 は、デヤがなく、ジャがわずかに用いられる地点だが、これも a 地域や b 地域の影響であろうか。地点によっては、デヤがジャに近く発音される傾向が強く、内的にジャが生じていたが、その後に周辺で生じたダを受け入れたという可能性もある。あるいは、富山市街地周辺などでは、デヤ/ジャを、位相的に低/高という場面で使い分けた時代があったとも考えられる。例えば、江戸時代、富山城下などの一部地域や、限られた階層の人々によってジャが使われていたのかもしれない。

4.2. a・b 地域のジャ・ヤ

次に、西日本的なジャ・ヤが主に使われる a 地域(呉西) と b 地域(猪谷)について考える。c・d 地域のデヤが中世中央語にさかのぼれるものであるとしたら、現在デヤが残っていない a 地域や b 地域でも、かつてはデヤが分布していたと考えられる。a・b 地域は現在、おおよそ「ヤが優勢/ジャが劣勢」という類似した使用状況を見せる。しかし、地理的には互いに分断されている(県の南方は丘陵・山岳地帯となる)ので、それぞれ異なった変遷過程を経たと考えなくてはならない。これも結論を先に述べると、以下のようになる。

- ・ a 地域では、石川県側からジャが伝播し、さらにヤが伝播した。b 地域では、岐阜県側からジャが伝播し、さらにヤが伝播した。

この解釈について、他の可能性も考慮しながら検討する。まず、西日本諸方言においてジャが古くヤが新しいことは、先行研究により明らかである。当該地域においても、話者の内省から、また、a 地域で山間部(図 1, 2 の下方)ほどジャが増えることから、ジャが古くヤが新しいと言ってよい。したがって、a・b 地域ともに、まずデヤからジャに移行し、さらにヤに移行しつつある状態と思われる。そして、a・b 地域ともに、ジャからヤへの移行過程においては、3.3.1.(1) の現象、すなわち、古いジャが撥音前接の際に用いられやすいという現象が起こっている。同じ現象が、西日本の他地域にも観察されることはずで述べた。

LAJ 46 図などによると、ジャ・ヤは西日本に連続した分布域をもち、a・b 地域もこの分布域の一端であることが分かる。このことから、デヤ→ジャへの変化が内的に行われたものと考える必要はなさそうである。

西日本のいくつかの地域では、ジャーヤの変化が、内的な変化と思われるところもある⁹。しかし、a・b 地域では、ジャとヤは明確に区別されている。ジャの子音が摩擦音で発音される b 地域でも、ヤと紛らわしい例はない。よって内的変化によるものとは考えられない。また、同じく西日本のいくつかの地域には、ヤが飛び火的に伝播したところもあるようだ(徳川・真田1988の中井精一氏記述部分、陣内1996など)。しかし、LAJ 46図によると、近畿から石川県にかけてヤが連続して分布しており、a地域のヤはその分布の東端にあたる。よって、地をはった伝播がまずあったと考えられる。b 地域のヤはどうか。LAJ 46図の岐阜での分布を見ると、ジャが多いが、ヤも散在する。岐阜のヤが地理的な伝播によるものにしろ、[ʒa]→[ja] という内的変化によるものにしろ、岐阜から b 地域にヤが伝わったと考えてよさそうだ。

a 地域の中心地高岡は、北陸街道によって古くから石川県側と通じている。近世には a 地域全体が加賀藩に含まれており、金沢が政治や文化の中心であったから、言語面でも影響を受けやすかったのだろう。

b 地域は、岐阜県側と古くより飛騨街道(現国道471号)が通じていた。飛騨街道沿道地域は、民俗面において飛騨方面からの影響を受けていることも確認されているという(『富山県の地名』 p.72 「飛騨街道」)。話者によると、明治以降は、岐阜と富山の県境集落同士で互いに嫁入りすることもあったそうだ。また、話者は二人とも「飛騨のことばはやさしく、こちらは汚い」と述べる。このような飛騨方言にプラス評価を与えるという言語意識も、岐阜側の影響を受ける基盤になっているだろう。

ジャが a 地域までしか伝播せず、c 地域に至らなかったのは、近世江戸期の加賀藩・富山藩の分立が原因と考えられる¹⁰。図3(図2の右下)に近世期藩領をのせた。富山藩は、加賀藩の支藩として寛永16(1639)年に分立、万治3(1660)年の領替によって図3の藩領が確立し、幕末まで続く。図2と図3を見比べると、富山藩領は c 地域に含まれることが分かる。特に、富山藩の西境が、c 地域の西境にほぼ一致する点は注目される。

4.3. d 地域のジャ・ヤ

4.3.1. デヤからジャへの変化

次に、デヤが残り、かつ西日本的なジャ・ヤが強い d 地域(呉東の東側)について述べる。この地域でも、ジャがヤより古いことは、話者の内省により明らかである。そこでまず、デヤからジャへの変化がどのような原因によるものかを考察する。

図3を見ると明らかなように、江戸時代、d 地域は全域が加賀藩に含まれていた。よって、この地域のジャは、江戸時代の加賀藩内の交流による伝播と考えるのが自然かもしれない。しかし、①デヤの実現形として、ダに近いものがあまりなく、摩擦を帯びたジャに近いものが聞かれること(3.2.)、②「一家の主婦」「年配の女性」など¹¹を表わすことばとして、d 地域周辺部にデヤーマ [dja:ma] やデヤーサマ [dja:sama]、d 地域中心部にジャーマ [dʒa:ma] やジャーサマ [dʒa:sama] がかつて存在したことの 2 点から、d 地域において内的にデヤージャという変化が起こった可能性も考えられる。

①②あわせて、もう少し詳しく検討する。ジャーマ・デヤーマなどの分布を図4に示す。指定辞ジャ・ヤが多いa地域にもジャーマ・ジャーサなどがあり、ダが多いc地域にこれらの語がないことに注意したい。さらに、ジャー(サ)マなどは石川県各地にもあり、デヤーマも能登にあるという¹²。ただしd地域では、指定辞としてデヤ・ジャ両方を使うが、主婦などを表す語の場合はデヤー(サ)マであって、ジャー(サ)マとは言わないという話者もいる。デヤー(サ)マ、ジャー(サ)マとともに昔のことばで、現在はほとんど用いられないという点はa・d地域に共通している。これらのことから、変化過程には次の3つが考えられる。

- ・ d地域の中心部において、指定辞とデヤー(サ)マという語でともに [dja]→[dʒa] という変化(破擦化)が起こった。
- ・ a地域からの伝播により、d地域の中心部でデヤーマがジャーマに移行した。それに類推して指定辞デヤージャの変化が起こった。
- ・ a地域からの伝播により、d地域の中心部で指定辞デヤがジャに移行した。それに類推してデヤー(サ)マ→ジャー(サ)マの変化が起こった。

それぞれの変化(破擦化、伝播による移行、類推変化)によってできた新しい語形ジャー(サ)マが周辺地域に広まる以前に、それらの語形全体が衰退したため、d地域周辺部ではデヤー(サ)マのみが「昔使ったことば」として記憶され、一方、指定辞デヤが変化したジャは周辺地域まで広まっていったと考えれば、上記3つのいずれをとったとしても、指定辞ジャよりジャー(サ)マの分布域が狭いことは矛盾なく説明できる。よって現段階では、d地域の指定辞デヤージャが、外的変化(他地域からの伝播)か内的変化かを決められない。[dja] が摩擦的噪音を伴って [dʒa] に近く発音されることがあった上に、a地域からの伝播もあったとすれば、内的変化と外的変化が相互に影響しあったと言えようか。

4.3.2. ヤへの移行

d地域では、次にジャからヤへの移行が起こっている。その過程では、a・b地域同様、3.3.1.(1)の現象が見られる。ジャからヤへの変化の原因について考えてみると、a・b地域と同様にジャとヤは明確に区別されているので、内的変化によるものとは考えにくい。ただ、a・b地域のヤが石川や岐阜からの伝播によると考えられるのに対して、d地域では、そのような地を這った伝播によるものとも考えにくい。ヤは幕末に近畿で生まれたので(『近世上方語辞典』)、近世期藩領内での伝播はありえないからである。

そこで、ヤは、西日本共通語としての性格から、d地域に飛び火的に伝播したのではないかと考えられる。ただ、地を這った伝播の可能性もないわけではない。例えば、北陸街道沿いにc地域の海岸沿いからd地域へ、ジャのちにはヤが伝わり、c地域の海岸沿いのジャは、富山市中心からのダの進出によってなくなつたという解釈もできる。このほうが、c地域の海岸沿いに散在するジャもうまく説明できる。

いずれにせよ、a・b・d地域でヤが若い人に安定して用いられるのは、ヤの西日本共通語としての性格、言い換えれば、関西方言の威光によるところが大きいと思われる。

4.4. c 地域のヤ

c 地域の劣勢のヤは、3.3.3.(3)(4)で述べたように、ガヤ、ソーヤ、ヤローという表現形が主であるが、その他の例も若干ある。これらのヤも、d 地域同様、飛び火的に伝播、あるいは a 地域から伝播したと考えることができる。それは、指定辞ヤそのものというより、ガヤ、ソーヤ、ヤローという表現形全体としての伝播と言える¹³。今後、ヤが西日本共通語という威光によって優勢となることも考えられる。現に、3.1.で触れたように、地点25～27(ちょうど富山市街地に位置する)ではヤの使用が増している。この結果から、富山市街地の老年層では、西日本的なヤの勢力が増してきていると言えるかもしれない。しかし、うち地点26・27の話者は現在 a～c の中間地域に住む。ヤが現在の居住地で獲得されたものとも考えられ、現段階では結論が出せない。

4.5. a・b・d 地域のダ

ジャ・ヤを主に使う a・b・d 地域の話者は、ダを「ふだん使わない」「標準語」と内省する。ダの使用数はほんのわずかで、かつ、3.3.2.(2)に述べたように、接続詞ダカラ・ダケドや助詞ダッテがほとんどという偏りがある。これら地域のダは、c 地域のダとは異なり、共通語ダの借用としての性格が強いと思われる。しかもその共通語化は、日常の言語生活にまで及んでいるとは言い難い。ここでいう「自然談話」のほとんどが、調査中に筆者に対する発話で用いた例ということに注意すると、多少「あらたまつた場面」で用いられた例と考えたほうがよい。

しかも、話者は指定辞ダを受け入れたというより、接続詞ダカラ・ダケドや助詞ダッテなどの形式全体を、一つの表現形式として受け入れたと言えるであろう。西日本方言では一般に「ジャ(ヤ)+接続助詞」という接続詞を発達させていないようである¹⁴。そのために、接続詞ダカラを受け入れやすいという事情があるのかもしれない。まず接続詞ダカラ・ダケドを受け入れた後、文中の接続表現ダカラ・ダケドなども用いられやすくなり、逆接表現では、共通語形「だけど」と形が近いダレド(已然形ダレ+接続助詞ド)にも援用されるという、受け入れの順があったとも考えられる。このような現象は、「あらたまつた場面」で言語使用の例とはいえ、受け入れられやすい共通語形の一例を示すものとして興味深い。

4.6. 中間地域や特異な地点について

3.1.で4つの地域区分のどれにもあてはまらないとした地点14～20は、吳東のもっとも西側に位置する。指定辞の使用も、ダ・ジャ・ヤが均衡する中間的な様相を示す。歴史的を見て、この辺りは明治以来、何度かの複雑な町村合併・編入を経た地域である。今の道路ができる以前は a 地域方面に買い物などに出かけたり、婚礼などを a 地域と行なったりという地点が多い。よって、この辺りでは社会的な帰属や経済的な依存の面において a 地域から c 地域への移行があり、それが言語面にも反映されたと見ることができる。c 地域に含めた地点29周辺でも、地点14～20と同様の地域事情があるという。よってこの地点で安定して用いられるジャは、a 地域の影響によるものと考えられる。

c 地域に含めた地点32(八尾町倉ヶ谷)も、比較的ジャが安定して用いられる。図2からは読み取

れないが、地点33(同・高野)の話者もジャの使用を明確に意識し、比較的多く用いる。この2地点は飛州二ツ屋村道(飛驒街道の裏道・現国道471号)沿いに面する。言語面でもb地域同様、飛驒方面からの影響があったのかもしれない。

c地域の地点43のジャは、地点52方面(富山市水橋。古くより売薬業などで栄えた商業地。d地域の最西の地点)からの影響と思われる。

d地域の地点60は、ダとジャを同等に用いるという点で特異な地点だが、司法書士という話者の職業その他の個人的な要因に帰せられるものだろう。

4.7. 呉東でのダの広がり

これまでに何度か触れたように、a・c・d地域のような指定辞の分布域は、富山藩と加賀藩の分立が大きく影響したと考えられる。廢藩置県後は、何度かの新県設置や合併などを経て、明治16(1883)年に旧越中国全域を管内とする富山県が設置され、富山市が政治・経済の中心地となった。図3に通勤率50%域を示す。これは富山市の商圏・第一次生活圏とも重なるという¹⁵。

図2と図3の藩領を見比べてみると、c地域のうち富山藩領に属しない地域でもダが使われていること、ジャ・ヤが多いa・b・d地域のうち、吳西のa地域よりも吳東のb・d地域のほうがダの使用が多いことが分かる。これについては、近代以降、吳東で富山市を中心とした生活圏が成立したことにより、周辺の地域にむけてダが広がりつつあるためと考えられる。特に地点48や地点51で、それぞれの市(滑川市、魚津市)の中心地で使われるジャ・ヤよりもダへの移行が進んでいるのは、鉄道や道路の整備・自動車の普及などにより、市の中心地よりも富山市街地への志向が高まったためと考えられる。b・d地点でダが多いのも、それらの文化的中心地が富山市にあるためだろう。逆にa地域(吳西)では、西日本や金沢への志向意識が高く、加賀藩に属していたことに誇りを持ち、吳東よりも文化的に進んでいるという意識が一般に強いようである。

4.8. 解釈のまとめ

4.1.~4.7.で述べた解釈の概略をまとめる。

- (1) もっとも古い語形はc・d地域(吳東)の周辺部にあるデヤである。
- (2) c地域のダは、デヤから変化したものである。その変化過程では、共通語ダによって変化が促進されたり、安定を得たりしたと思われる。変化のきっかけが共通語ダの存在であったとも考えられる。
- (3) a地域では石川県側からジャさらにヤが、b地域では岐阜県側からジャさらにヤが伝播した。
- (4) ジャがa地域までしか伝播せず、c地域に至らなかったのは、近世期の加賀藩・富山藩の分立によるものと考えられる。
- (5) d地域のジャはa地域から伝播したものとも、この地域にあるデヤから変化したものとも考えられる。
- (6) d地域のヤは、西日本共通語としての性格から、飛び火的に伝播したものと考えられる。

あるいは、北陸街道沿いに c 地域の海岸沿いから d 地域へ、ジャのちにはヤが伝わり、c 地域の海岸沿いのジャは、富山市中心からのダの進出によってなくなつたという解釈もできる。

- (7) c 地域では、西日本的な新語形ヤを、ガヤ・ソーヤ・ヤローといった形式を中心に新しく受け入れ始めた。
- (8) a 地域では、共通語としてのダを、ダカラなどの形式を中心に改まった場面で用い始めた。
- (9) 近代以降、吳東では富山市を中心とした生活圏が成立し、近世期富山藩領に含まれない地域にもダが広がりつつある。

5. 「では」の分布

尾張近辺の方言では、指定辞デヤとともに、「では」（指定辞連用形や格助詞「で」+係助詞「は」）相当のデヤが存在したことが明らかになっている。また、同地方の近世期文献には「では」相当のダの用例もあるという。（芥子川1971、同1983、彦坂1997）

今回の調査で、富山県内にも「では」相当のデヤ・ダが使われていることが分かった。また「では」相当のヤもある。これらを指定辞デヤ・ダ・ヤの分布とともに地図化したものが図5～7である¹⁶。この3図から以下の3つが読み取れる。

- (1) 「では」相当のデヤは指定辞デヤよりも広い地域に分布する。
- (2) 「では」相当のダの分布域は、指定辞ダの勢力が強い地域に含まれる。
- (3) 「では」相当のヤの分布域は、指定辞ヤの勢力が強い地域に含まれる。

(1) については、指定辞デヤが全く使われない吳西や富山市の北部にも見られることが注目される。芥子川（1983）によると、尾張では、指定辞デヤがなくなった後も「では」相当のデヤが聞かれるといい、富山における(1)の現象と重なる。指定辞デヤより「では」のデヤが残りやすいのは、「デア」¹⁷「デワ」¹⁸という原形が意識されやすいためと思われる。富山県では、指定辞の場合とは異なり、より原形を保った [deja] という例も聞かれた。

(2) に示した「では」のダは、指定辞がデヤからダへと変化したために、それとの類推で変化したものと考えられる¹⁸。あるいは、指定辞デヤからダへの変化が共通語ダの関与以外の契機によるものであれば、「では」と指定辞の変化は同時に進んでいったとも考えられる。

(3) は、c 地域に例外となる地点もあるが、これらの地点も指定辞ヤを全く使用しないわけではない。

なお、「では」のデヤ・ダは60歳未満の話者では全く用いられなかった。

6. 全国的な変遷との関わり

以上、富山県方言における指定辞の変遷について、現在の使用状況や県の歴史的事情との関わりから論じた。ここで、以上の解釈が全国的な指定辞の変遷とどう関わるかを確認しておく。

ダ・ジャの東西差の発生についての論で特に注目されるのは、柳田（1993）の「なぜ西部方言は「ジャ」で東部方言は「ダ」であるのか」である。柳田（1993）は、「デア」から先に「ダ」が生まれ、遅れ

て「ヂヤ」が生じたとした上で、「ヂ」の破擦音化、それに伴う四つ仮名の混同の生じた時期に東西差があったという仮説のもと、東に「ダ」が、西に「ヂヤ」が定着していった過程を推論した。結論の傍証として、現代方言において、一つ仮名弁の地域が指定辞ダの分布域に含まれることが上げられている(p.977)。

川本(1971)などにより從来から明らかなよう、富山県の大部分も一つ仮名弁的である。吳東には指定辞ダもあるので、一見、ますます一つ仮名弁地域と指定辞ダの分布地域との対応が深まるようと思える。しかし、①柳田(1993)が想定したダの発生はdea→daというものであるが、富山市周辺のダは[dja]が変化したものと考えられること、②ヂヤが現在でも残っており、ダの発生はそう古くないと推測されること、③富山では、破擦化しないヂヤ[dja]がよく聞かれるのに対し、ヂは破擦子音の[dʒi]が一般的であり、両者の変化は並行的なものとは思えないこと、の3点から、少なくとも富山県における指定辞の変遷に、柳田(1993)の論ずるような事情は関わらないと考える。

近世から現代にかけての諸地域における、ヂヤ(「ヂア」などの表記もある)の残存、ダへの変化を報告する先行研究を見ても、その変化過程は、音声変化などの統一的な理由で説明できない。周辺地域の指定辞の分布など、個々の地域の事情によるところが大きいようである。

7. おわりに

以上、富山県方言の指定辞ヂヤ・ダ・ジャ・ヤについて、地理的分布や各分布域における併用状況を明らかにし、その史的変遷過程を考察した。史的変遷を解釈するなかで、c 地域におけるヂヤからダへの変化、d 地域におけるヂヤからジャへの変化などの要因については、いくつかの可能性を指摘するに止まり、明確な結論を出すことができなかった。しかし、これらの問題は、調査地点の密度を高くすることによって解決する問題ではないように思われる。むしろ、能登など他地域における指定辞の分布を調査したり、富山県における指定辞以外の言語事象(あるいは言語以外の事象)の分布を調査したりすることによって、より明確な結論が得られると考えている。これらを今後の課題としたい。

注

- 1 キリストン資料「dea」、抄物資料「ヂヤ」等の例とそれについての先行研究は、柳田(1993)p.945 及びp.981の注4を参照されたい。
- 2 ほか、真田(1984)、藤原(1962)を参照されたい。
- 3 ほか、NHK編『全国方言資料』第3巻「入善町小摺戸」の談話資料でヂヤが使用されている。金森(1932)については真田信治先生よりご教示いただいた。なお、五箇山におけるジャからヤへの変化については、真田(1979)、同(1983)を参照されたい。
- 4 ただし、ヂヤと他語形との優劣は問わない。ヂヤの回答数は、調査者と話者の親疎関係や調査時の状況に大きく左右され、実際の日常生活での使用実態を反映しないように思われたためである。図2凡例では「ヤ/ジャ,ヂヤ」などのように“,”のあとにヂヤの使用を示す。優劣の基準は、語形AとBについて、Aの回答数がA+Bの回答数の7割以上なら「優勢」、7割未満なら「同等」

とする。3語形が回答された場合も2語形ずつ比較した。(この方法では「ヤはダに対して優勢、ヤとジャは同等、ジャとダは同等」などの関係が生じる恐れがあるが、結果としてこのような地点はなかった。) 凡例では“・”で同等の関係，“/”で優劣の関係を表わす。“・”を挟んだ左右の語は、左が右より多いということを表わさない。例えば「ヤ/ジャ・ダ」は「ヤがジャに対して優勢かつヤがダに対して優勢」という関係を表わす。「ダのわずかな使用」としたのは、ダが回答数の合計の1割未満の場合である。また、凡例の「ヤ・ジャが主」「ダとジャ・ヤが同等」とは、「ヤまたはジャが主」「ダとジャ、またはダとヤが同等」の意である。以上の基準は、分布が明確に出るよう恣意的に定めたむきがあることは否めない。語形の統合や扱わない語形については以下の通り。①「東だ」の意の「ヒガッシャ」はヤに含めた。②「のだ」相当の「ガヤ」の場合、ヤがはっきり発音されずに「ガエ」～「ガイ」、「ガー」となることがあるが、ヤに含める。③c 地域ではまれにヲが聞かれるが、ダ行子音とラ行子音の交替例と考え、ダに含める。同じ地点の交替例として、ほかに「ソラケ」(それだけ。周辺地域では「ソダケ」がふつう。)などが得られている。3.2.で述べるように、デヤをリヤに近く発音する地点もある。④地点71(朝日町蛭谷)で「東デジャ」という回答があった。調査時の確認不足で、「デジャ」が一語なのか二語なのか不明だが、地点65(同.笹川)では、近所の人と道で会った時のあいさつとして「ココナスタッツ、ドーデ」(ここ家の人のたちはどうですか。一お宅の皆さんお元気ですか。)という表現が以前にはあったという。このデと「デジャ」のデとは同語と思われる。とすれば、デは「デス」の転で、それに終助詞ジャがついたものの可能性が高い。いずれにせよ、現段階ではこれをデヤ・ジャなどと同等に扱ってよいものか問題が残るので、以下の考察では扱わない。⑤一部の地域では、形容動詞活用語尾として、終止形ナなどがあるがここでは扱わない。

5 山口(1996)p.53参照。筆者も『全国方言資料』の録音資料で確認した。

6 話者の発音を筆者が真似して内省する限り、舌端から前舌前面部にかけてと歯茎から硬口蓋前面にかけてとが閉鎖をつくる音である。日本語のチャ・ジャ・ニヤの閉鎖に近いが、より閉鎖の前後の面積が広いように思う。ロシア語における [d] の口蓋化子音とは聞こえが随分異なる。ロシア語の場合は、出わたりに摩擦的噪音を伴うが、富山県の [dj] では、そのような摩擦的噪音がほとんどないのが普通。ただし本文にも記した通り、それが伴ってジャに近く聞こえる例もある。

7 筆者はキリストン資料の「dea」表記が、[dea] という音価を持つものとは限らず、よって日本語の歴史上、[dea] という指定辞が存在した証拠もないと考える(小西1998)。したがって、富山でのこの発音が、「dea」表記の名残で、[dja] より古い形(あるいは本来的な形)とは考えない。仮に、中世の中央語において [dea] があったとしても、現代富山県方言ではすでに [dja] が一般的な形である。丁寧に発音すると [dea] になるということもなく、話者が [dea] を本来の形と意識しているわけでもない。よって、少なくとも共時的に見て、指定辞の形態素として /dea/ をたてることはできないと考える。

8 だからといって、これらの地点において [dja] が /da/ や /zja/ の異音というわけではない。[dja] は、3.2.に記した①～③に限って用いられ、*デヤイコン(大根)、*ヨンデヤ(読んだ)などはない。

9 筆者による NHK 『全国方言資料』の聞き取り調査では、九州にジャ・ジャル(ジャは [ʒa]) から変化したと思われるヤ・ヤルが多い。もちろん、近世末上方語でも指定辞ジャーやの変化は内的に起こったと言える。

10 近世期藩領と指定辞の分布の類似については、方言研究会発表時に真田信治先生よりご教示いただいた。

11 意味にも地域差があり、a 地域中心地では「妻の卑称」、同山間部や d 地域の一部で「年配の女

性」，d 地域の他地点で「一家の主婦」を表わす。同じ地点でも語によって意味の違いがあることもある。調査地点にない上平村でも、真田ふみ(1978)p.28により、ジャーマ・ジャー・ジャーサという語形の存在が確認できた。

- 12 川本(1980), 馬場(1996), 国立国語研究所(1989a)p.111,p.168を参照。
- 13 これら3つがなぜ受け入れられたかは、複合度・一語性が高いという以外には不明。井上(1996)p.13は、ジャを使うのは大分県で「ソーヤ」が使われていることを報告し、「ソーヤ」は終助詞ヤからの連想が働いて使いやすいのではないかと述べている。
- 14 『方言文法全国地図』第1集36図参照。言うとしたら「ソンジャサカイ」のような「それ」相当語がついた形が多いようだ。同図でも接続詞ダカラは文中のダカラに比べ全国的に広く分布している。
- 15 下野(1983)p.315参照。『富山県大百科事典』(s51富山新聞社)によるという。筆者未見。
- 16 調査項目「魚ではないよ」などの回答と自然談話の例、両方による。他にデワ・デ・ジャも用いられるが、ここでは扱わない。
- 17 NHK『全国方言資料』からの聞き取りによると、富山県方言も含み、全国的に多くの方言で係助詞「は」が「ア」と言われる。そのような方言では前接母音がイ・エであるときには、順行同化でヤになることが多い。同資料では、指定辞デヤの報告がない栃木・新潟・三重でも、「では」相当「デア」の縮訳形と思われるデヤ[dja]が数例聞かれた。ただし例はきわめて少なく、富山とは定着のしかたに大きな違いがある。
- 18 近畿で指定辞ヤの後に「では」のヤが生まれたことも参考になる。『方言文法全国地図』17図、147図で「では」のダの全国分布を見ると、指定辞ダの使用域である東日本や京都北部～山陰に点在している。「では」のヤは、近畿で主に用いられ、西日本の周辺地域にも点在する。全国的に見ても、「では」のヤは指定辞ヤの分布域中に含まれていると言える。

参考文献

- 愛宕 八郎康隆 (1969) 「奥能登珠洲方言の「デア・ジャ・ヤ」」『国文学攷』49, 48-58, 広島大学
井上 史雄 (1996) 『にほんごいちはば』私家版
- 金森 久二 (1932) 「中新川郡における指定の助動詞概観」『越中方言研究彙報』5, 37-38, 越中方
言研究会
- 川本 栄一郎 (1971) 「富山県庄川流域におけるズーズー弁の分布とその解釈」『語学・文学研究』
2, 1-10, 金沢大学
- 川本 栄一郎 (1980) 「奥能登の親族呼称」『国語学』120, 42-52
- 九州方言学会 (1969) 『九州方言の基礎的研究』(改訂版1991) 風間書房
- 芥子川 律治 (1971) 『名古屋方言の研究』泰文堂
- 芥子川 律治 (1983) 「愛知県の方言」『講座方言学6 中部地方の方言』国書刊行会
- 国語調査委員会 (1906) 『口語法調査報告書』下, (復刻版1986) 国書刊行会
- 国立国語研究所 (1966) 『日本言語地図』第1集, 大蔵省印刷局
- 国立国語研究所 (1979-82) 『方言談話資料』(2)(4)(6)
- 国立国語研究所 (1989a) 『日本方言親族語彙資料集成』秀英出版
- 国立国語研究所 (1989b) (1993) 『方言文法全国地図』第1, 3集, 大蔵省印刷局
- 小西 いずみ (1998) 「指定辞「dea」「デヤ」の音価について」『日本方言研究会第66回発表原稿集』
- 真田 信治 (1979) 「一集落内における敬語行動」『地域語への接近』秋山書店

- 真田 信治 (1983) 「「ジャ」と「ヤ」の闘争過程——集落全数調査と録音文字化資料から」『国語学研究』23, 1-10, 東北大学
- 真田 信治 (1984) 「方言の助動詞」『研究資料日本文法・助辞編(二)助動詞』明治書院
- 真田 信治 (1994) 「富山県の方言について」『阪大日本語研究』6, 131-142
- 真田 ふみ (1978) 『越中五箇山方言語彙(6)——人間・親族に関することばー』私家版
- 下野 雅昭 (1983) 「富山県の方言」『講座方言学6 中部地方の方言』国書刊行会
- 陣内 正敬 (1996) 「西日本方言の変容と関西方言」小林隆他編『方言の現在』明治書院
- 高瀬 重雄監修 (1994) 『日本歴史地名大系16 富山県の地名』平凡社
- 徳川 宗賢・真田 信治 (1988) 「和歌山県中部域の言語動態に関する調査報告」『大阪大学日本学報』7, 147-212
- 日本放送協会編 (1966-67) 『全国方言資料』第1-9巻, 日本放送出版協会
- 彦坂 佳宣 (1997) 『尾張近辺を主とする近世期方言の研究』和泉書院
- 藤原 与一 (1962) 「日本語諸方言上の「ダ・ジャ・ヤ」」『方言学』三省堂
- 馬場 宏 (1996) 「能登半島における「父・母」の呼称」『日本方言研究会第62回発表原稿集』
- 前田 勇編 (1964) 『近世上方語辞典』東京堂出版
- 室山 敏昭 (1965) 「京都府奥丹後袖志方言の断定の助動詞について」『日本方言研究会第2回発表原稿集』
- 室山 敏昭 (1967) 「京都府与謝郡伊根町方言の「ダ」ことばについて」『生活語研究』2, 3-33, ノートルダム清心女子大学
- 森田 武 (1989) 『邦訳日葡辞書』岩波書店
- 柳田 征司 (1993) 『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武藏野書院
- 山口 幸洋 (1996) 「方言における文字化の条件——表記以前の問題ー」『日本語学』15-4, 45-56, 明治書院

付 記

原稿提出後、真田信治先生のご教示により、『入善町史 通史編』(平成2年)の方言の項で、佐伯安一氏が筆者と同じ解釈をしていることを知った。以下にその箇所を引用する。「一般に富山県内では呉西が「ヤ(ジャ)」、富山市近辺が「ダ」、それから東が「デヤ」となる。この分布から推すと、富山市の「ダ」は、東部方言の「ダ」ではなくて、もともと「デヤ」であったものが標準語の影響を受けて変化したものと見ることができる。」(p.714)

本論は、第62回日本方言研究会(1996年)で発表した内容をもとに、調査地点を増やし、大幅に加筆・訂正したものである。話者の方々、塚田実知代氏、井上優氏をはじめとする話者を紹介して下さった方々、篠崎晃一先生をはじめご指導・ご教示いただいた諸先生・諸先輩方に深くお礼申し上げます。

(投稿受理日：1998年7月16日)

(改稿受理日：1998年9月28日)

小西 いづみ (こにしこにしきみ)

東京都立大学人文学部国語学研究室 192-0393 東京都八王子市南大沢1-1

konishi-izumi@c.metro-u.ac.jp

The distribution and the history of copulas in Toyama Prefecture

KONISHI Izumi

Tokyo Metropolitan University

Keywords

copula *da*, Toyama dialect, East-West distribution, standard forms in Western dialects, *Han*

The Japanese copula *da* is generally distributed in Eastern dialects, and *zya* and *ya* in Western dialects. A popular view is that “*dea*” and “*deja*”, which were used in the records near the end of the Muromachi period, changed to *da* and *zya*. Some dialects of present-day Japanese have *dye* which is considered to be related to “*dea*” and “*deja*”. Although the Toyama Prefecture dialect is classified as a Western dialect, some studies have shown that it not only has *zya* and *ya* but also *da* and *dya*. The purposes of this study are to investigate how these forms are geographically distributed in Toyama Pref. and to consider the history of these forms.

From the results of a survey, the following distributions were discovered. In the Western area, *zya* and *ya* are primarily used. In the Southern area, near the boundary with Gifu Pref., *zya* and *ya* are used primarily and *da* is used secondarily. Inside Toyama City and its surrounding areas, *da* is used primarily and *ya* secondarily. Occasionally, *dya* and *zya* are also used in areas farther from the city. In the Eastern area, both *zya* and *ya* are used primarily and *da* is used secondarily. In more remote areas, *dya* is occasionally used.

From these distributions, we can conclude the following about the history of these forms. 1. The oldest form is *dya*. 2. In the Toyama City area, *dya* has been changing to *da* without any influences from standardization or diffusion from other areas. 3. *Zya* and *ya* in the Western area were diffused from Ishikawa Pref. 4. In the Southern area, these same forms were diffused from Gifu Pref. 5. In the Eastern area, it is likely that *zya* has been diffused from the Western area. It could also be possible that *dya* changed to *zya* without diffusion from another area. *Ya* was spread from the Kansai dialect, or by geographical diffusion along the Hokuriku Highway from the West.